大草小学校だより

第 34 号（R6-13 号）

令和 6 年 12 月 6 日　　校長　山口　隆

人権について

「人権を持っていると思う人…持っていないと思う人」
子どもたちに聞いてみると、ほとんどが「持っていない」と答えました。人権とは「人間が、人間として当然に持っている権利」であり、だれでも持っていることを確認しました。その中でも、昨年と同じく「子どもの権利条約」（日本ユニセフ協会抄訳版）の第12条 「意見を表す権利」について紹介しました。（意見表明権）

「子どもは、自分に関係のあることについて自由に自分の意見を表す権利をもっています。 その意見は、子どもの発達に応じて、じゅうぶん考慮されなければなりません。」

この権利を守るために、まず、私たち教師自身が全力を尽くすことを誓いました。
「私たち大人も人を傷つけたり、傷つけられたりして生きてきました。失敗したり、間違ったり、思い通りにいかない体験を重ねながら生きてきたのです。そんなとき、誰かに相談して聞いてもらったり、励ましてもらったりして乗り越えたことも多くありました。みんなもこれから辛く、悲しい思いをすることが、きっとあるはずです。少しでもその時間を減らせるように、何かあったらぜひ相談してください。全力でみんなが幸せに生きる権利を守っていきます。でも、残念ながら自分が辛い思いをしていることは簡単には言えないこともあります。なぜなら心配をかけたくないからです。プライドが邪魔するからです。」

次に、子どもたちにも全力を尽くしてほしいことを話しました。
「だからこそ、みんなにも、つらい思いをしている人がいないか、悲しそうにしている人がいないか、目を凝らして見る必要があるのです。ため息をついている人がいないか、耳をそばだてる必要があるのです。そして、もしそれに気づいたならば、その口で励ましの言葉かけてあげてください。逆に誰かを傷つける言葉のナイフを発する口にはしないでください。」

２日、３日は北海道教育大学の宮原先生をお招きし、遠くは熊本からの先生を含め15名を超える来校者と、どうすれば誰一人取り残さず、みんなが学びに没頭できるか、研鑽を深めました。学校での一番長い時間である授業中につらい思いをしている人がいないか、目を凝らし、耳をすませ、励まし続けていくことを再確認しました。

４日はピースバトンの学生二人を講師に、「人権が完全に無視される行為である戦争」を2度としないことを祈りつつ、今生きている幸せをかみしめながら平和カルタを作りました。（この模様は来週の月・火曜日に諫早ケーブルメディアで放送予定です・長崎新聞には本日掲載されました）

５日の人権集会では、「誰一人悲しい思いをしないドッヂビー」を目指して、高学年がルールを工夫してくれました。「子ども27人対先生たち大人」です。1回戦はあまりの人数差に大人の負け。それを見て、とっさに「5，6年生が先生チームに入る」というアイディアを出してくれた5，6年生。その結果2回戦は先生たちも本気で楽しみ、先生方からも笑顔があふれていました。「みんなが笑顔で終わるドッヂビー」をやってのけたのです。5，6 年生のルール改変はあっぱれでした。

これからも、一人ひとりが主人公として、大人も子どもも人権感覚を研ぎ澄まし、「みんな笑顔の大草地区」を目指していきましょう。

大草小の大先輩から

12月4日、一通のゆうパックが届きました。それは、江﨑辰男さんという方からでした。中を見ると、1 冊の本とお手紙が入っていました。

本は「感謝の出会い」～波乱万丈の回顧録～という自伝史でした。

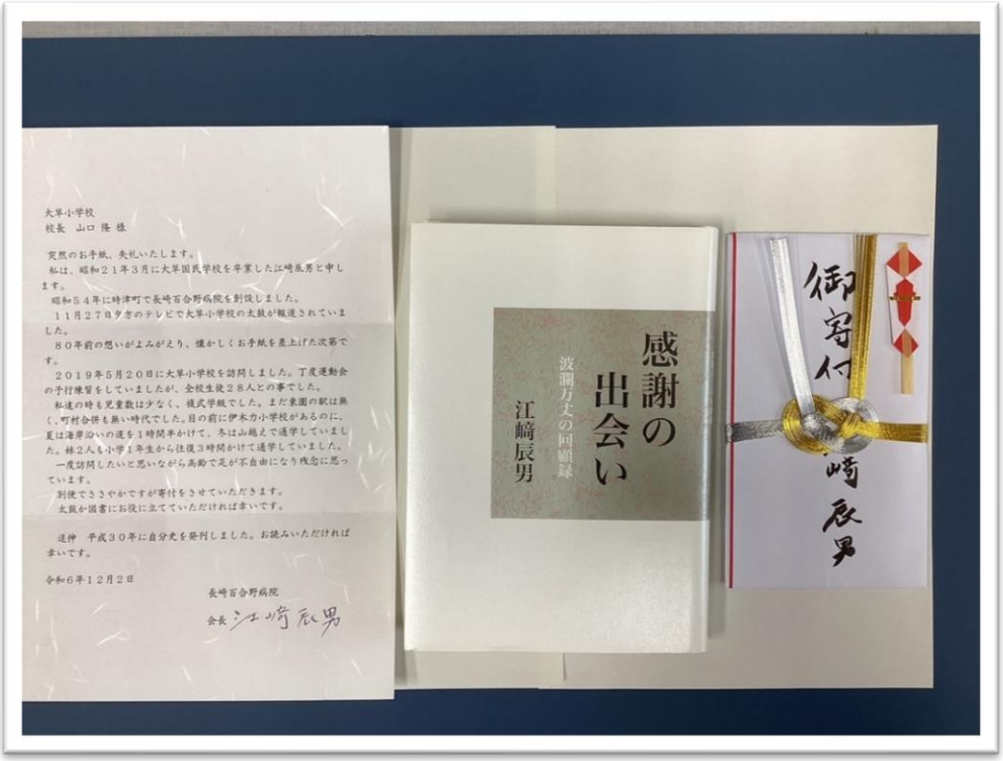
お手紙には、本校を昭和21年3月に大草国民学校を卒業したこと、ご自身のころも複式学級で、兄妹と往復3時間かけて通学していたこと、東園駅はなかったこと、長崎の百合野病院を創設したこと、などが書かれていました。

11月27日に放送されたNIBのニュースを見て、80年前の思い出がよみがえり、お手紙を書かれたということでした。

また、本日は、太鼓や図書に役立ててほしいということで、ご芳志も書留で届きました。

江﨑さんご本人にお礼を言うべく、百合野病院に電話をすると、失礼ながら91歳とは思えないほど元気なお声が返ってきました。ご本人に許可をいただいて、今本記事を書いているところです。ご芳志は2年後の150周年行事に活用させていただくこと、記念式典には必ず来てほしいことなどをお伝えし、電話を切りました。

一つのニュースが、県内にいらっしゃる先輩方の心を揺さぶったのです。改めて大草太鼓のすごさを感じています。



江﨑辰男様、本当にありがとうございました。今後とも、大草小学校のことを見守ってほしいと思います。